論文審査の結果の要旨

氏名：藤　澤　惇　平
専攻分野の名称：博士（医学）
論文題名：小児異物誤飲における年齢的特徴

審査委員：（主 査）　　教授　　木　下　浩　作

（副 査）　　教授　　越　永　從　道　　教授　　奥　田　貴　久

教授　　大　島　猛　史

小児において異物誤飲は頻発する疾患であり、誤飲物により緊急性や処置が異なる。原因異物の特定が必要だが、困難な場合が多い。同じ小児患者であっても、精神発達や運動発達は年齢により異なるため、誤飲異物毎の年齢的特徴を知ることは、誤飲物の推測・予防のきっかけとなる。そこで、本研究では、誤飲異物毎の年齢的特徴があるのかを調べることで、予防に繋がるのではないかと想起した。
対象・方法：研究デザインは、2013 年 4 月から 2018 年 6 月までの期間の附属病院診療録を基にした探索的観察研究であり、異物誤飲(ICD-10:T17-T18)と診断され、データベースに登録された 16 歳未満の小児 252 例を対象とした。原因異物をタバコ、プラスチック、内服薬、化学薬品、金属、電池、硬貨、紙、磁石、ゴム、ガラス、食品、その他の 13 群に分け、各原因異物と年齢の関係を分析した。
結果：患児の年齢の中央値は 15 ヵ月で、140 人は男児（55.5%）であった。発生現場は、家が一番多く 170 例で 67%を占め、学校やゲームセンターなどの公共施設では 11 例であった。誤飲の多くが保護者の保護下で生じていた。173 例が何を飲み込んだといった現病歴を根拠に診断されており、79 例が身体所見や画像所見、内視鏡検査所見を根拠に診断された。来院後に行った治療としては、無治療が 205 例(81%)と一番多く、続いて内視鏡などによる摘出術が 29 例（11%）であった。異物は、タバコ（n = 44、17%、［年齢の中央値］12 か月）、プラスチック（n = 43、17%、11 ヵ月）、化学薬品（n = 27、11%、13 ヵ月）、金属（n = 26、10%、35 ヵ月）、内服薬（n = 26、10%、33 ヵ月）であり、誤飲異物間における年齢に有意な特徴を認めた（$p < 0.01$）。タバコにおける年齢は、金属、硬貨誤飲の年齢と比べ小さかった（$p < 0.01$）。プラスチック、タバコ、紙、化学薬品における年齢は、内服薬誤飲の年齢と比べ小さかった（$p < 0.01$）。
考察：年齢により誤飲をしやすい異物が異なることを明らかにした研究はない。誤飲物毎の月齢の中央値の違いがあり、乳児、幼児、学童の層別化において主要誤飲物の頻度に違いを認めた。誤飲物が不明の場合、児の年齢層から誤飲物を推定することができ、患児の侵襲的検査の必要性の判断や、対応など診療の助けとなる。年齢層毎の誤飲異物の頻度を基に、よりきめ細やかな小児誤飲事故予防の啓発を保護者にすることできる社会的意義は大きく、極めて価値のある研究である。今後、小児異物誤飲の診療、予防の双方においても役立つと考える。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以　　上

令和　3 年 2 月 17 日